

こぎつね 「小狐の太刀の話」

「小狐」とは藤原氏伝来の名刀の名です。その作者は「さんじょうこさじ三条小鍛冶」こと宗近。むねちか10世紀頃の人物とされ、「天下五剣」の一つで国宝に指定されている太刀「みかづきむねちか三日月宗近」の作者としても知られる、伝説に彩られた日本刀の黎明期の刀鍛冶です。

「小狐の太刀」については、時の帝みかどであった一条天皇より作刀を命ぜられたものの満足のいく刀を打てずに悩んでいた宗近を助けるため、氏神であった稲荷明神が童子に身を変えて相槌あいづちを打ったという逸話が「小鍛冶」という謡曲にもなっておりますが、もう一説には醍醐天皇の御世、雷神となった菅原道真が内裏の上空で暴れるのに恐怖した帝が「今日の番神ばんじん*1はどの神か」とお尋ねになったところ、藤原忠平の佩刀つかがしらの柄頭に白狐が現れたので「稲荷大明神の番でございます」と答えたところ間もなく雷雨も去ったので、この刀を「小狐の太刀」あるいは「雷切」と名づけたともいいます（ただし醍醐天皇の御世は宗近が活躍したとされる時代と合致しません）。やがて藤原鎌足の影像・惠亮和尚筆の法華経とともに藤原氏の三宝の一つとなったそうです。

文献上は、少なくとも仁平2年（1152）8月に時の藤原氏の氏長者・左大臣藤原頼長が小狐の太刀を佩いて石清水八幡宮に参詣したという記録が残っています（「兵範記」）。その後九条家、鷹司家に伝来し、いつ頃か京の建仁寺大統庵所蔵となっていたものが、やがて紛失し行方が知れなくなっていたといえます。

この「幻の名刀」小狐丸について、松平春嶽が「真雪草紙」に次のように記しています。

「一安波賀の春日神社の神主である吉田運吉の家に代々秘蔵の三条小鍛冶宗近の太刀があった。享保の頃、幕府の寺社奉行からこの太刀の件で問い合わせがあり、「小狐丸影」（小狐丸の影打ちかげうち*2）であるという報告を提出したということになっている。これは京の九条家が、元々所持していた小狐丸が越前の春日社にあるという噂を聞き、將軍家へ問い合わせたので、やむを得ず寺社奉行から尋ねることになったもので、寺社奉行からも、たとえ本物の小狐丸であったにせよ、「小狐丸の影打ち」ということで書付を提出するようにと内々に指示があったものである、ということを神主の吉田運吉より聞いたことがある。

その後明治10年（1877）に帝が奈良の畝傍山と孝明天皇陵へご参拝され、また西南戦争が起こったこともあって京都の西京にご滞在の際、私（春嶽）もお供して西京に滞在していたが、その際九条道孝公と同居することがあり、その時に道孝公より「越前の安波賀の神社に小狐丸という名刀があったという話を聞いたが、現存しているのだろうか」という質問を受けたので「私も一見したことがあり、現在も同社が所蔵しています」と答え、その場はそれで済んだのだが、後日九条公より申出があり、先日話に出た安波賀社の小狐丸の太刀をどうしても私の所有にいたたく内務省に申し立てをしたい、とのことであった。私（春嶽）が「その太刀にどのような由緒があるのか、お聞きしたい。事情によっては私がお世話申し上げてもよいので」と申し上げると九条公は大いに喜んで次のように語られた。「ご承知のとおり五撰家はわが九条家のほかに二

このえ たかつかさ条・近衛・鷹司・一条家の各家があります。これら五家のうち九条家が本家なのだが、何をもって本家とするかといえは、その小狐丸を所有しているということを証とするのです。しかし小狐丸の本物は当家より失われて久しい。よって享保の頃に幕府へ申し立て、越前松平家へ問い合わせたことが旧記にも見えます。そもそも鎌倉時代以前の昔、わが家のある先祖の代に男子二人がおりました。兄の方は病身で盲目となつてしまい、次男のほうへ九条家を相続させることにしたのを、兄は甚だ不平に思っていた。その兄の子もやはり不満を抱いており、彼がある時叔父の留守を見計らって相続の証である小狐丸を盗んで逃亡してしまいました。これ以後、やむなく九条家では名人に依頼して新たに小狐丸を作らせ、今まで所持しているのです。近衛家でも本物の小狐丸を所有しているつもりでいるようで、そちらの方もその後どうなっているのか…」私（春嶽）は答えて「私も以前安波賀の春日社へ参詣した際、神主から聞いたところによると、神主である吉田氏の先祖が江戸で安価にて買い求めたものだそうで、以前は公家の所有だったと言いつたといわれていたという話でした。そもそもこの刀は春日神社の宝物ではなく、神主である吉田家の伝来品であるということですよ」と申し上げたら九条公は「そうであればやはり譲渡の仲介をお願いしたい」とおっしゃった。もちろんただ取り上げるというわけにはいかないので、九条家が買い求めるということであればお世話できるであろうと約束し、その後家令である武田正規とも話し合い、神主の吉田氏にもかけあつたところ、当時吉田家も零落した状態であり、刀をこの先永く同家に伝来させるということもできそうにないということであったので、九条公に太刀を献上し、金子を頂いて田地などを買い求めれば、吉田家・九条家双方のためになるであろうと説得し、吉田氏も承知したので、結局小狐丸の太刀は吉田氏より九条家へ献上され、九条家からは金百円ひゃくえん*3が支払われた。これで全く小狐丸はもとの九条家にもどつたのである。…」（以上筆者意識）

享保年間に幕府より福井藩に小狐の太刀について照会があつたことは、福井藩についての歴史書「続片警記」にその時の覚書の写しが掲載されていて、確かめることができます。これによれば享保4年（1719）2月に時の老中久世大和守重之より書付にてお尋ねがあり、これをうけて領国内くまなく調査を行い、3月には安波賀の春日神社にそれと思しき、「宗近」の銘と鞘書に「小狐丸影」とある太刀が見つかったので、どのような由来のものなのか詳しく聴取が行われたけれども、神主の吉田宮内少輔からは「由来は何も伝わっていない」という返答であつたとされています。またこの「小狐丸影」の実物も同年4月に江戸に運ばれ幕府にいったん差し出されたものの、將軍吉宗が上覧した後、再び春日社に返却されたということです。

はたして、越前安波賀の春日社に伝来した太刀が本物の小狐丸であつたのか、また明治になって九条家に戻つたとされるその小狐丸は今どうなっているのか、現在ではまた所在が不明になっているということで、確かめる術がないのですが、いろいろと想像を掻き立てられるお話ではあります。（松村知也）

*1 番神……内裏三十番神。内裏を日替わりで守護するとされる三十柱の神々。

*2 影打ち……刀工は大事な注文を受けた際に2振の刀を作り、出来の良い方を納めるということがある。影打ちはその際に納めなかった方の刀。たいていは無銘のまま安価に売り払われるか、処分されるという。

*3 百円……明治中期頃の100円というと、現在の価値に換算するとだいたい100万円前後になるようです。